

## 輸血検査技師と診療支援-できることを探す-

◎日高 陽子<sup>1)</sup>  
東邦大学医療センター大森病院<sup>1)</sup>

## 【はじめに】

臨床検査技師（以下、検査技師）は、検査のみではなく臨床への支援が求められている。しかし、現状では臨床現場で活躍している検査技師はわずかである。輸血分野において検査技師が臨床支援のために、「何ができるのか」、「どうすれば良いのか」を考えたい。

## 【何ができるのか】

現在、医師や看護師が行っている業務のうち、検査技師もできる業務について考えたい。

2019年の「タスクシフト/シェアの推進に関する検討会」で、検査技師が行っても良いと判断された業務に、「輸血関連検査結果の説明」「輸血承諾書の取得」「輸血副反応確認」があげられた。「輸血関連検査結果の説明」は、医師に報告することは一般的であるが、直接患者に対して説明を行っている施設は少ないと思われる。また、「輸血承諾書の取得」は主に医師が行っている。これらの業務は、日頃輸血を専門にしていない医師よりも、輸血検査に携わっている検査技師の方が適任と考えられる。また、多忙な医師への臨床支援にもなる。次に「輸血副反応の観察」である。輸血は開始してから5分間はベッドサイドで患者の観察を行い、15分後にも患者の観察を行う必要がある。多数の患者を担当している看護師は、輸血以外の業務にも追われている。患者の観察を検査技師が行うことで、看護師に対しての臨床支援を行うことができる。その他の臨床支援として、救急室での緊急輸血管理や手術室の輸血管理なども行えるであろう。

## 【どうすれば良いのか】

検査技師が臨床支援を行うためには、人員を確保しなくてはならない。そのためには輸血検査業務の効率化が必要である。例えば、自動機器の積極的な利用やT&Sの導入も考えられる。業務の効率化により人員が確保されれば臨床支援を行うことが可能である。また、支援内容を理解し、検査技師に不足しているスキルを身に付ける必要がある。そのためには、日頃からの医師や看護師とコミュニケーションを取り医師や看護師など他職種から知識や技術を学ぶ必要がある。

## 【結語】

臨床検査は自動化が進んでおり、解析などについてはAIも導入されることが予想される。また、業務の効率化などから外注やブランチ化される施設も散見される。今後、検査技師が医療施設で働いていくためには、必要とされる検査技師にならなくてはいけない。その方法のひとつが臨床支援であると考え。臨床支援は、すぐに開始できるわけではない。人員の確保や臨床側の理解・協力が必要である。今後を見据えて、各施設でできることを考える時期が来たと思う。

連絡先：[youko@med.toho-u.ac.jp](mailto:youko@med.toho-u.ac.jp) 03-5763-6660